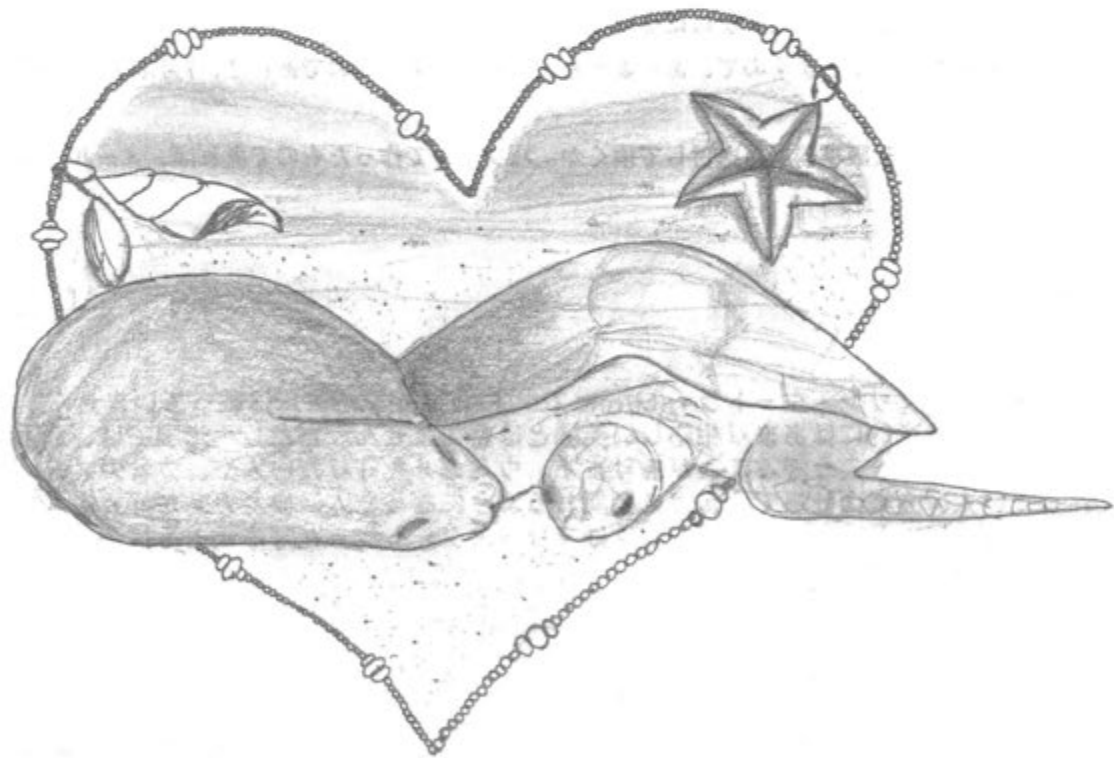


Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第8号



表紙の絵

会員の田畑絵理さんが描いてくださいました。田畑さんは高校生で、ウミガメにたいへん興味を持っておられ、イベントにもよく参加していただいています。前号の表紙の絵の募集を見て、イベントでお会いした時に、いち早く持ってきてくださいました。しかも3枚です！優しい絵をありがとうございました。

表紙の絵募集しています。

引き続き、表紙の絵を募集しています。ウミガメをみる機会がある方は、ぜひ描いてみてください。また、いつもウミガメに関わっておられる方も、一度騙されたと思って描いてみてください。（そういう私も描いてみます・・・）お待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。仕上がりは、モノクロになってしまいます。
- 期限：随時募集していますので、ありません。次号に掲載するのであれば、7月末までをお願いします。
- 応募方法：直接大阪事務局に送付して頂くか、パソコンで作ったものであれば、メールで送付してください。

会報の名称マリン・タートル(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine
Turtler

Contents



マリンタートル列伝 沖縄編その6
「御前洋氏と宮脇逸朗氏」 亀崎直樹・・・3

ウミガメ基礎講座
「ウミガメの呼吸」 松沢慶将・・・4

志布志湾のアカウミガメ 大和隆信・・・5

ウミガメの民俗 4
「知多半島のウミガメの墓 2」 藤井弘章・・・7

表浜とアカウミガメ 田中雄二・・・9

黒島会議の報告（事務局）・・・11

漁師のNPO（事務局）・・・12

事務局より・・・13



マリンタートル列伝

「御前洋氏と宮脇逸朗氏」

亀崎直樹

皆に注目を浴びていないものに目を向け、その面白さを発見し、それを世間に紹介することは一種の快感です。既に、注目を浴びている研究に、後からしゃしゃり出てくる研究は、何となく金の臭いを感じますし、そもそも面白さに欠けるのは当然のことかも知れません。

沖縄で毎年少数のタイマイが産卵することはあたりまえのこととなっていますが、沖縄で初めてタイマイの産卵を確認したのはかつての海中公園センター八重山研究所の研究員達でした。そういう私も1983年から4年間勤めましたし、理事の宮脇さん、平手さんや黒柳さん、それに監事の岩瀬さんもこの研究所の研究員でした。今回の列伝では、研究所が出来た頃、黒島西の浜でウミガメの産卵を確認し、沖縄におけるウミガメ研究の先鞭をつけた御前洋さんと宮脇逸朗さんを紹介したいと思います。

実は彼らが黒島でウミガメを観察している頃、(1975年から1980年)私はまだ鹿児島大学の学生で、大学の近所の騎射場市場で1個20円のウミガメの卵を2個買って、1個はインスタントラーメンに入れて食べ、もう1個は植木鉢に埋めて孵化させよう、などと馬鹿なことをやっていた時代です。その頃のウミガメの研究事情は極めて浅薄なもので、日本のどこでどんなウミガメが産卵するかもわからない時代でした。そんな中、初代の研究員でもある御前洋さんは、カメの産卵期になると、西の浜に出かけ、カメの観察を行っていました。

御前洋さんは周りからオジンとかミーヤンとか呼ばれ、実に親しみやすいキャラクターをお持ちなのですが、その興味の対象が広いことで有名で

す。ある時は、魚の分類に、あるときはサンゴの産卵に、そしてまたあるときはオニヒトデにと、その興味は多岐にわたり、数えられないくらいの研究対象生物があります。その当時の御前さんの興味の対象の一つに西の浜のウミガメがあったのでした。

御前さんの黒島の任期が切れ、それを本格的に引き継いだのは宮脇逸朗さんでした。宮脇さんといえば、日本ウミガメ協議会では最もダンディーな理事です。氏は徹底的に夜間の観察に時間をさき、日本で初めてタイマイの産卵生態に関する記載を行いました。今では、日本でもタイマイが産卵することはよく知られていますが、それがきちんと確認されたのは、このときが最初だと言えます。

今では西の浜にいたる海岸林を抜ける道は、随分広げられ、夜でもその不気味さが消えてしまいましたが、当時は後背の森も深く、真っ暗な浜辺ではいろんな不可思議な体験をした人が多くいました。森の中から人の話し声が聞こえてきなどという話が沢山あったのです。私も一度浜でうとうととしているときに、人に起こされて目を覚ましたような気がしたことがありました。宮脇さんもその不可思議な経験について記載されています。興味のある方は、串本海中公園のマリンパビリオンという機関紙(Vol 11 no5)をご覧ください。当時は学生がカメを見つけると、私の部屋まで必死に1キロ程走って産卵を伝えに来てくれていた時代です。今は携帯で走ることはなくなりました。自然の中に身をおいても孤独ではなくなりました。携帯は自然の神秘さをも奪ってしまったのかもしれない。

ウミガメ基礎講座5 「ウミガメの呼吸」

松沢慶将

先日、3歳になる娘が突然しゃっくりをしました。少し慌てたのですが、実は大人に比べて幼児は頻繁にしゃっくりをするそうで、後で知って安堵しました。さて、ウミガメはしゃっくりをするのでしょうか？答はNoです。ウミガメを含め、爬虫類には横隔膜がありません。横隔膜とは、腹腔と胸腔を仕切っている膜状の筋肉です。我々哺乳類はこれを動かして胸腔内の気圧を変化させることで、間接的に胸腔内にある肺を膨らましたり萎めたりして、肺の中の空気を交換しています。しゃっくりとは、この横隔膜がけいれんをおこした状態のことです。ウミガメには横隔膜がないのですから、しゃっくりのしようがありません。

では、横隔膜がないのに、どのようにして肺の空気を交換しているのでしょうか？ムカシトカゲ、トカゲ、ヘビの類は、胴体の脇側にある筋肉と肋骨の間にある筋肉を交互に動かすことで胸郭を広げたり縮めたりして、間接的に肺を膨らませたり縮めたりして呼吸しています。胸式呼吸といったところでしょう。ワニの場合は、比較的頑丈な骨格を発達させた分だけ、胸式呼吸への依存度は低くなります。むしろ腹筋を使って肝臓を前後に動かして、その前方に隣接する肺を伸び縮みさせています。エセ腹式呼吸ともいうべきでしょうか。さて、カメの場合はどうでしょうか？残念ながら、胸式呼吸も複式呼吸も無理です。肋骨と皮膚とが癒合して胴体全体が頑丈な甲羅に覆われるようになってしまったからです。仕方なく、手足や頭とそれに繋がる筋肉・骨格を甲羅の中に出し入れすることで、ポンプの役目としました。誰も賛同しないと思いますが、言うならば、「手足頸式呼吸」というわけです。砂浜に上陸したアカウミガメを見ていると、時々軽く頭を持ち上げて呼吸をしています。水の中にいるわけでもないのだから、わざわざ重い頭を持ち上げずとも普通に息をすればいいのと思うところですが、実はそ

うしないと息が吸えないのです。

思えば、ウミガメは一生を通じて呼吸には難儀をする動物です。海が荒れて水没すれば卵は窒息します。孵化したとしても、卵の時に酸欠状態に晒された子ガメはその後の成長も生き残りも悪くなります。海で暮らすようになってからは、それこそ息継ぎの度に海面に浮上しなければならず、仮に何か障害物によって浮上を邪魔されれば溺れてしまいます。海岸侵食や漁具による混獲など、現在ウミガメに対する脅威のかなりの部分は、実はウミガメとその卵が水中で呼吸できないことに関係しています。淡水性のカメの中には、咽頭や総排泄孔の内壁の粘膜を補助呼吸器官として発達させ、水中の酸素を積極的に取り込むことに成功したものもいます。進化の道のりでウミガメもそちらの道を行っていったなら・・・

奇しくもこの原稿を書いている最中に、腰を痛めてコルセットを巻く羽目になりました。腹の代わりに胸を膨らませしのいではいるものの、何とも息がしづらく、ちょっとだけカメの気持ちがわかった様な気がしています。とほほほ。

図 ウミガメの呼吸



カメは四肢につながる筋肉と首を伸ばすことにより甲の中の圧力を低下させて肺をふくらませる。(息を吸う)



逆に、甲の中に四肢や首を引っ込めることにより、甲の中の圧力を高めて肺を縮める。(息を吐く)ウミガメは肺活量が大きく、息が荒いことでも知られる。

志布志湾のアカウミガメ

大和隆信

九州の最南端、大隅半島に抱かれた志布志湾は本土で最も早くアカウミガメが産卵にやってくる海岸の一つです。5月の連休が終わる頃、カメたちの上陸・産卵が始まります。これまでで一番早く産卵があったのは、昭和の終わり頃の、4月26日でした。それ以来4月の産卵は確認できず、大体5月10日頃から産卵シーズンが始まります。

なぜ？

私がウミガメと関わり始めたのは“新全国総合開発計画”が発表され、鹿児島県でも“志布志湾開発計画”が策定された昭和42年のことでした。この年の春、高校を卒業して家業に従事した私にとって、この巨大開発は、「海とはなにか？漁民だけの海なのか？人間だけの海なのか？」と考えさせ、その後の人生に大きな影響を与えました。結論から設定されるアセスメント計画、数字で比較される豊かさ、行政が投げかける問題に対抗する知識も能力もなかった私にできるのは、数字に表せない“海の豊かさ”を、漁民以外の人たちに知ってもらうことでした。

当初は

ウミガメに関わり始めた頃は、湾の中央部よりやや西よりの田原川と肝属川の間、横瀬海岸と柏原海岸だけの監視活動でした。

長男として家業に従事した私は、沖に出るのチリメンジャコ漁を生業としていました。夜明けとともに出漁し、午後には帰港する毎日ですから、暇を見つけての海岸巡りでした。

昭和60年頃から末弟に漁を任せ、自分は加工に専念するようになったことで、毎日の監視活動ができるようになりました。昭和63年に

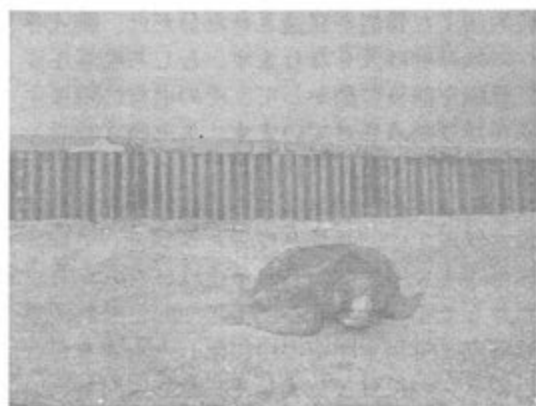
はウミガメ保護条例が制定され、翌年の平成元年より施行されたことをきっかけに、活動の記録を残し始めたのでした。

保護監視員

大崎町では横瀬海岸と益丸海岸にそれぞれ監視員が委嘱されましたが、湾に面した内之浦・高山の両町・東申良町・有明町・志布志町には、監視員がおかれませんでした。

浸食

昭和55年には備蓄基地が完成し操業を開始。また志布志港も大型化したことにより、湾奥の両端で大規模な砂浜の浸食がみられるようになりました。当初は柏原海岸の浸食が大規模に出現したのですが、近年は今尚拡大を続けている志布志港西・有明町の海岸に大きな変化が出てきています。



有明町の押切海岸

浸食により、高波が人家にまで押し寄せる恐れがあるために、海岸に鋼矢板が1キロにわたって打ち込まれている。



柏原海岸

一度浸食されたところを、河口付近のヘドロ混じりの砂を持ち込み復旧作業をしたが、再度の浸食で堅い部分だけが残りこんな浜が出現。(平成15年夏)

監視活動

平成元年、上陸・産卵回数が横瀬海岸と柏原海岸で合わせて70回を超え、益丸海岸では推定30回が確認されました。そして、その翌年からより正確な数字と、台風の影響による産卵巣の流失から卵を保護するために、大崎町の全域を監視区域としました。そのような活動を続けているうちに菱田川の東・有明町と志布志町の海岸も、住民の方から連絡を頂いて駆けつけるようになり、いつしか毎日の監視体制に入っていました。

特例

鹿児島県の監視員は、県から市町村に業務委託され、市町村長により監視員の委嘱がなされています。しかし、私の場合は複数の町にまたがっての活動であるために、平成8年、鹿児島県内の保護活動に従事するという知事からの直接の委嘱を受けました。これは市町村の枠を超えて保護活動ができます、ということなのです。

上陸・産卵の現状

平成元年には、大崎町だけで1000回以上の上陸・産卵があったのが、海岸の浸食と歩調を合わせるかのように減少を始めました。特に平

成6年は前年比50%と落ち込み、12年には湾全体で25回の産卵しか確認できませんでした。海岸の浸食が進み、流失する卵が増え始めた為、安全な場所に移設する作業をはじめたのも条例の施行と同時でした。以来志布志湾では台風や高波による流失被害はほとんどありません。平成14年7月末、志布志港に入港し、折から接近した台風を避けていた飼料運搬船が流されて座礁し、真っ二つに折れた船体から油が流出したときも被害はゼロに食い止めることができました。

減少が続けた上陸・産卵も平成16年度には70回を超え、平成17年度は初上陸・初産卵の日が、平年に比べ20日程遅くなりましたが、49回の上陸、43回の産卵があり、減少傾向も終わったのかなと、今後に期待を持てるようになりました。

今後の課題

一番の課題は行政を始めとして、協力者が少ないことです。有明町で地域住民の意識が高まってきつつはありますが、湾岸全域をカバーするには足りません。小学校で総合学習として取り組んでくれている学校もありますので、放流会やこれらの学習活動を通じて、協力者を募っていただければいけないと思っています。私が動けるうちに次の世代を育てることも、志布志湾では欠かせない大事な仕事のようなのです。



鹿屋市の浜田海岸

幅10メートルほどの狭い海岸で、今年は5回の産卵があった。近くの小学校の児童が見守る中で市役所の職員が移設作業。

ウミガメの民俗4

「知多半島のウミガメの墓2」

藤井弘章

前回に引き続き、愛知県の知多半島に見られるウミガメの墓について取り上げます。今回は漁師が建立したウミガメの墓について紹介したので、今回は漂着したウミガメを葬った墓について紹介したいと思います。

前回の紹介で、知多半島には伊勢湾側と三河湾側をあわせて23か所のウミガメの墓があるという話をしました。そしてそれを、「知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗」(『名古屋民俗叢書 4 環境とくらし』名古屋民俗研究会、2005年9月)という論文でまとめました。しかし、つい最近、常滑市に新たに1つのウミガメの墓が見つかりましたので、これを含めると、知多半島には合計24か所の墓があることになりました。このうち、漁師の網にかかっていたウミガメを葬った墓は8か所、漂着したウミガメを葬った墓は9か所です。その他は、時代が古いこともあって、どういう経緯でウミガメを葬ったのか不明です。

このように分類すると、死んだウミガメを埋葬・供養して墓を建立するという行為には2つのパターンがあったということが分かります。知多半島の漁師は、操業中にウミガメが網にかかって死んだ場合、ウミガメを怒らせないように、漁をつれてきてもらうように、ということで丁重に供養しました。それでは、漂着したウミガメを葬る行為には、どのような気持ちが働いていたのでしょうか。

確実に漂着したウミガメを葬ったと分かる墓は、伊勢湾側では知多市日長の大龍寺、常滑市瀬木の共同墓地、美浜町野間の正蔵寺、南知多町山海の西方寺、同町大泊の意徳院、同町豊浜(小佐)の浄土寺、三河湾側では美浜町布土の葦航寺と安養寺、武豊町大足の徳正寺にあります。これらは、いずれも明治末から昭和にかけて建立されてきたものです。たとえば、山海で

は、海岸近くに住む竹内七郎さん(大正10年生まれ)のおばあさんが、浜で死んでいるウミガメを発見して、近くの西方寺の境内へ埋葬しました。おばあさんは、浜が好きで毎日浜へ出かけていたといい、浜を散歩中に死んだウミガメを発見したといいます。七郎さん自身も、その後浜で死んだウミガメを発見したため同じように西方寺へ埋葬したそうです。埋葬したうえで自然石をおいて墓石としました。(写真1)



写真1

このように、直接埋葬にかかわった方がいらっしゃる場合は少なくなりましたが、その他の事例も、地域の人が浜を散歩しているときなどに浜辺や河口付近で死んだウミガメを発見して、それを寺院の住職に連絡し、埋葬・供養したというものが多くあります。埋葬にかかわった人のなかには漁師もいますが、網にかかっていた場合とは違った気持ちがあったようです。人々がウミガメを葬ったのは、そのままでは異臭を放つので放置できないという物理的な理由もありました。こうした理由による埋葬

は、今でも漂着した場合に各地で行われていることです。しかし、住職を呼んで供養をし、人間と同じような墓まで建立するというのはどういふことでしょうか。

知多半島でのウミガメの産卵は、南知多ビーチランドの黒柳賢治氏によると、それほど多くはないようです。したがって、人々はウミガメが産卵に来ることを喜ぶという気持ちがあったようです。上陸した場合には産卵後に酒を飲ませて帰すこともあったそうです。そんななか、死んでいるウミガメが打ち上がっていたのを見つけると、「かわいそう」に思っ埋葬するということがありました。また、大龍寺常滑市瀬木、浄土寺の事例では、2匹のウミガメが相次いで打ち上がったといい、見つけた人々はこれらを夫婦であると考えたり、「奇縁」として捉えて、ウミガメが何らかの意思を示していると考えたようです。さらに、墓石に刻まれた文字を見ると、漁師が建立した墓石には「摩訶龍龜大菩薩」などと書かれていましたが、漂着したウミガメの墓では「福寿法亀」、「延命長寿」、あるいは

「亀翁善生」などと刻まれているのです。こうしたことから、漂着したウミガメには延命長寿を願って葬るという気持ちもあったことが分かります。

最後に南知多町浄土寺のオカメサンについて簡単に紹介しておきます。これは明治42年（1909）に埋葬されたもので、今のところ、知多半島では一番古い墓のようです。これは、次のような由来があります。明治42年、南知多町小佐の海岸に瀕死のウミガメが漂着し、地元の漁師と当時の浄土寺の住職が浄土寺の境内へこのウミガメを埋葬し祀るようにしました（写真2）。カメの甲羅には「奉大海龍大神」という6文字と、伊賀上野の住人谷村佐助以下11人の名前を記してあったため、住職がそれをもとに連絡を取ったところ、難病にかかった伊賀上野の商人・谷村佐助が、ウミガメを供養したことによって病気が治癒したため、お礼に伊勢からそのカメを海に放したということが分かったのです。その後、浄土寺ではこれをオカメサンとして祀るようになりました。浄土寺は知多四国88か所霊場の番外札所であったため、オカメサンの話は知多半島のみならず周辺地域まで広がり、現在の碧南市の信者の難病が治癒するという奇跡が重なって、一層その霊験が知られるようになったのです。

知多半島で明治の末期以降、これだけのウミガメの墓が建立されるようになったのは、浄土寺のオカメサンの話が広まったということが重要なきっかけになっていると思います。この話が頭のどこかにあったうえで、浜辺で死んでいるウミガメを見つけたとき、寺院や墓地に埋葬して供養してあげよう、という気持ちが人々に生じたのだと思われます。



写真2

藤井 弘章（ふじい ひろあき）

1969年和歌山市生まれ。現在、国学院大学日本文化研究所の専任講師（民俗学）を務める一方、日本ウミガメ協議会特別研究員。

表浜のアカウミガメ

田中雄二

通称、表浜海岸。渥美半島の遠州灘に面した太平洋岸をそう呼んでいます。今年で28年近く、ここ豊橋の表浜海岸に波乗りを通じて接していました。休みのほとんどを（よく飽きもせず）浜辺で過ごして来た訳ですが、実は私（田中雄二）はあまりウミガメには縁はありませんでした。今から思えば不思議なぐらいですが、年に1回くらいアカウミガメの漂着死体や消波ブロックに挟まった死体を見たことがある程度でした。1度オサガメの漂着死体に出くわし、よくもまあ大きなウミガメがいるものだなあと感心した程度です。

なぜ表浜のアカウミガメの巡回を今年から始めたのか……。それは今思えば、ある人の企みにはまったように思います。それは、毎朝、浜辺を走り抜ける一人の怪しげなおじさんに出会ってから……。始まったようです。怪しげなおじさん。そう、私ども表浜ネットワークの創設者：加藤弘さんです。朝から浜で物好きな人だな〜と（加藤さんもこちらをそう見ていたようです）いつも不思議に思っていました。ちょっとした事（粗糲の設置だったと思うのですが）に呼ばれて今の関係が始まってしまった訳です。

表浜海岸の様々な面を見せるためにハックルベリーフィンのように悪戯っぽいニヒルな笑顔で、私を連れ回したのです。夏はウミガメのストランディングがあると、なぜだか私の携帯電話に一報を入れメールリストに流すよう指示するのです。お陰様で、海の波ばかり見ていた視野が浜辺側、今まで見えていなかった表浜海岸に目が向いてしまったのです。それから数年、表浜ネットワークとして様々な多面的変化と沿岸地域特有の社会問題を加藤さんと一緒に考え活動してきたと思います。残念ながら、2年前に過労と高血圧が原因で加藤さんは倒れてしまいました。いきなり担う事になった表浜ネットワークの看板と加藤さんの調査資料を潰させまいと、なんとか継続させて来たのですが、表浜ネットワークの活動の片翼のアカウミガメの調査は、まったく私には見当もつかないものでした。1年目はNPO法人化に費やして過ぎたものの、さあ2年目。アカウミガメの上陸時期が目前

に迫っても何も案が思い浮かばず「ええい！誰もやらないのか！」と結局、自分でアカウミガメの調査巡回に向かう決心をしてしまいました。当初、ネットワークのもう一人の設立の青木さん（豊橋技術科学大学海岸工学教授）は加藤さんの苦勞を知って無理でしょうと笑ってみえました。と言うのは豊橋の海岸行きは14キロで海岸は悪路と砂浜を走らなければ到底、朝の時間内に回ることは出来ません。私は幸い加藤さんよりスリムです。バイクという手段を取り、早速中古のトライアルバイクを用意しました。しかし実際始めると早朝の真っ暗な海岸を頼りないライトで走る恐怖とタイヤを砂に捕られないように押さえる体力走行にたじろぎました。10キロ程度でも小2時間程度掛かってしまいます。汗だくです。しかもアカウミガメの上陸跡はなかなか見つかりません。焦りと疲労が直ぐに溜まってきました。（当然ですが4月中旬から始めたからです。上陸が5月半場からとは誰も教えてくれなかったのです。）豊橋域だけでもこんなに大変なのかと、今更ながらに驚きます。



バイクでの巡回風景

そんな鬱積の日々も、やがて本来のアカウミガメの上陸シーズンに入ったのです。いざ上陸が始まるとそれが面白い面白い、表浜海岸を延べつもなく走ると、色々とアカウミガメの上陸する様子が分かってくる気がしてきます。アカウミガメの上陸と産卵行動を見ると、個体別に様々な性格が

あるような気がしてきました。アカウミガメから見た海岸の環境の違い、もしくは砂浜や海の状態をより深く捉える面白みが出てきたのです。

さて、そこで1年目の素人の目で見ても不思議な現実と直面しました。どのように見てもアカウミガメの上陸を砂浜の中間にある消波ブロックが阻んでいるのです。上陸のカウントを初めて半数以上が阻まれているのです。兼ねてからその問題は聞いてはいたのですが直面すると余りにも納得出来ない現状でした。まず、砂浜の中間にある消波ブロック自体が護岸には機能していないようなのです。ちなみに隣県では砂浜の中間には設置してありません。表浜の砂浜は比較的緩やかな斜面と細かな粒径で浜を形成しており、消波効果は浜自体に能力があります。昨年の高潮と大型台風でかなりの砂浜で消波ブロックが露出した訳ですが、そもそも数年前には砂浜に埋もれていたのです。埋もれて消波能力が機能していたとは考えにくいのです。その浜辺の中間にある消波ブロックが今や亀返しブロックとなっているのです。ある浜では100メートル近くアカウミガメが消波ブロックに沿って移動し、汀線から数メートルのところで産卵したが直ぐに潮位が上がり残念ながら水没していました。ブロックにブロックされパニックに陥ったように回転するタートルトラックを毎日見るにつれ今の惨状を伝える事が出来ているのか、調査体制にも疑問を持ち始めました。消波ブロックに上陸を阻まれたアカウミガメが2度目の上陸を試みて夕方まで居残る傾向や消波ブロックに囚われ海に戻れないアカウミガメも産卵時期後半には縦続きました。この表浜海岸では、侵食は全国同様に地域社会の問題になっています。砂浜は侵食を和らげる緩衝的な役割を持ち増減を繰り返しながらも、海から陸を守っているのですが、今や河川からの砂の供給が減少した上に、局所にしか対応しない人口構造物を設置し、海岸の砂浜は今や偏っています。

問題の根源は供給元と偏りの問題で、その影響による砂浜の増減を安直に陸の侵食と直結し語られる事も多く、護岸対策が違った解釈の元で推進されているように感じます。1年に1メートルは侵食すると地域では子どもにまで教えられ、そこに地域のタブーとして護岸が謳われ護岸対策が推進されてきたのです。

その砂浜にアカウミガメは何も知らずに上陸し、消波ブロックに阻まれ産卵したとしても砂浜の変

動が大きな帯域で産卵し、今年はほとんどの産卵巣が砂に埋もれたか、流失に至った次第です。この表浜でのアカウミガメの惨状は社会が深く関わっている事には間違いが無いような気がしてなりません。

加藤さんのちょっと気難しいニヒルな笑いが今は少しは理解出来る気がします。さて、私にはニヒルな笑いが出来るのでしょうか。よく暴走すると加藤さんになだめられていました。(実際は僕がなだめ役だったのです)この1年で28年間、表浜でなかなか出くわさないと考えていたアカウミガメがこんなに私たちの近くに居た事が分かりました。人とアカウミガメの共存を目指すにはいくつものタブーの壁を変えて行かなきゃいけないようです。

※この文章は、2005年11月2日に書かれたものです。



表浜おいでん祭に出席した加藤さん

第16回日本ウミガメ会議 (黒島会議) 報告

いざ黒島へ!!



参加者を出迎える横断幕

2005年11月18~20日、沖縄県八重山諸島黒島で第16回日本ウミガメ会議が開催されました。今年のテーマは「沖縄」!! 若者に負けじとがんばる「おじい」や「おばあ」にスポットライトを当て、これまでの苦労や成果を語ってもらいました。この黒島はアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイが産卵に訪れる西の浜を有し、人口の何と10倍もの牛が住んでいる珍しい島です。多くのカメ屋を魅了してやまないこの島には「獅子ぬ棒」など、数多くの伝統的な踊りが受け継がれています。ウミガメ会議の最大の見せ場である懇親会では、地元の有志による踊りが披露され、老若男女問わず、夜遅くまで踊り語り合う宴が繰り広げられました。



黒島研究所での夕飯

初日の夜は黒島研究所で恒例のライブオークションと、オデンをお供に小宴会が催されました。三味線の音を聞きながら1年のカメ調査の疲れをそれぞれ癒されたのではないのでしょうか?



振舞われた牛料理

地元の青年会による牛料理。ステーキに牛汁に…沖縄の泡盛と一緒に飲んで食べて堪能しつくしました。青年会の皆さんありがとうございました!!



島民+参加者

やっぱり最後は踊って締めくくらねばなりません。会議の準備をして待っていてくれた黒島の皆さんと夜が更けていくのも忘れ参加者全員総立ちで踊りました。またきつと帰って来ると心に誓いながら。

また次の会議で会いましょう



1年に1度日本中のカメ屋が集まるウミガメ会議。今回も懐かしい顔にいっぱい出会えました。それと温かく迎えてくれた黒島の人達。本当にこの3日間お世話になりました。また来たい島「黒島」。皆さんの心にはどのような思い出が刻まれたのでしょうか。

次回は、熊野・七里御浜会議です。

開催日：2006年11月18日(土)~20日(月)

既に、HPで紹介していますのでご覧ください。

漁師の NPO

黒潮に洗われ荒れ狂う海。
そんな海に果敢に挑む男達がいる。
—漁師—

誰よりも海を知り尽くし、海を愛してやまない男達が、
今、自分たちの海を守るため立ち上がった。

私達日本ウミガメ協議会は、2002年から高知県室戸市において、周辺海域で操業する高岡・三津・椎名の3大数組合と共にウミガメ類の調査を行ってきました。これまでに標識を装着して放流したウミガメ類はすでに500個体を超えています。そのような活動を続けてきて、最初はただお手伝いをしてくれていた漁師さん達が、次第に自分達が野生生物の保護に取り組むこと、そして何より自分たちが暮らしている環境について真剣に考えるようになってきました。そこで全国で初めて、漁師が漁師のために出来ることを考えるNPOを立ち上げることにしました。海を知り尽くした男達が考える地域の活性化策。安心でおいしい魚を食卓に届ける工夫。そして漁業の未来を築きます。



左の写真はマンボウの味噌煮。
通信販売もしてくれる。その他にもここでしか味わえない漁師料理がたくさん。一度は食してみたい食材をアレンジして提供しています。



毎年8月に開催される海洋深層水フェスタでは、ウミガメの展示や捕れたての魚介類を販売しています。珍しい品揃えに訪れるお客さんもビックリ！

賛助会員募集中!!

漁師のNPOでは活動に賛同してくれる仲間を募集しています!年会費は1万円。え!高い?そんな事はありません。何と会員には1年に1度捕れたての海の幸をお送りします。何が届くかはお楽しみ。また、入会記念としてその年に製作したオリジナルT-シャツをプレゼント!!詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

漁師のNPO プロフィール

認証年月日: 2006年1月25日
代表: 山下 明博
事務局員: 山崎千亜希

〒781-7101
高知県室戸市室戸岬町椎名701
TEL&FAX: 0887-22-1685

「いつでも遊びに来てください!」笑顔で迎える山崎事務局員。



事務局より



「春」

出会いと別れの季節です。新たな道を踏み出す職員、スタッフがいます。そして、大きな希望を抱くフレッシュなインターン生が加わりました。

事務局で総務・経理を担当しておりました朽見です。
このたび、3月末に協議会を退職し、九州へ行くこととなりました。協議会事務局には約5年間勤め、会計や保険などの業務を担当して皆様には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。新しい職場は、水産養殖業を行っているところです。プリやトラフグの親から、稚魚を育て大きくすることが仕事です。今後はウミガメ協議会での経験を生かし、「食」に関する仕事を通じて、社会に貢献することができればと思っています。それでは、皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。 朽見健一郎

井嶋 千絵（いじま ちえ）

平成18年度からお世話になっています。井嶋千絵です。
大阪の堺市で育ち、野生動物をみる機会が少なかったので、野生動物のみれる所で住むのが夢です。個人的にはクジラが好きです。これからいろいろ勉強させていただきます。宜しくお願いたします。

中本 真理子（なかもと まりこ）

この4月からお世話になっています。中本真理子です。
岐阜の山奥（飛騨）から海に憧れて出てきました。神戸動植物専門学校で、2年間海洋生物について学びました。日本ウミガメ協議会では、ウミガメの調査から事務の仕事まで様々な事を経験し、自分の力にしたいと思っています。宜しくお願いたします。



ベトナムから研修生

2/7にベトナムから当会に研修生が来ました。ベトナム中部のNui Chua National Parkで勤務されている、Le Thi Quynh Han さん(女性)です。今回は財団法人地球環境市民財団の助成事業で日本に来ていただきました。ベトナムの沿岸には屋久島や宮古島で産卵したアカウミガメが泳いでいることが、標識調査で明らかになってます。日本ではアジアのウミガメに関する資料を収集し、混獲個体の調査を体験していただくことになっています。将来、ベトナム沖のウミガメ調査が一緒にできればと思っています。(亀崎)



和歌山県みなべ町千里浜にて、
後藤清さん(理事)とハンさん

ハンさんの「日本滞在記」

私が日本に来た2月7日は寒い日でした。日本の季節はベトナムのそれとは違っていることを感じました。ベトナムに帰国するのは3月30日になります。今回、日本に来ることができて感謝でいっぱいです。特にたくさんの日本の人と会い、日本人の仕事への取り組み、人生観を学ぶことができました。はじめの2週間は、大阪の事務局でウミガメの生態に関する研究手法や保全について学ぶ機会がありました。特に、ウミガメの種類とその足跡の見分け方、卵の取り扱い、砂の温度の計測などを学びました。また、石原孝さんの「冬季に確認されたアカウミガメの精子産生」、島達也さんの「黒島の研究所について」など、ウミガメの研究発表聞く機会がありました。20日からは熊野市の紀宝町ウミガメ博物館を視察しました。21日は串本海中公園センターへ行きました。そして、視察最終日の22日はみなべ町千里浜を訪れ、後藤清さん(理事)にお会いし、これまでみなべ町でされてきたウミガメの保護活動について学ぶ機会を得られました。26日は、事務局にて竹内有加さん(鹿児島大学)、中田史子さん(神戸大学)、森恵理香さん(東京大学)が集まり、彼女らの研究発表を聞くことが出来ました。3月4日から15日までは室戸の研究基地に滞在し、33頭のウミガメの調査を行うことができました。室戸に滞在中は、一緒に調査をしている漁師の皆さんはとても温かく親切で、特にウミガメを守ろうとする彼らの姿勢には驚くばかりでした。



室戸での調査風景

この研修の最後の週は、南知多ビーチランドと東京に行く予定です。最後になりましたが、この素晴らしい機会を得ることができたのも、亀崎直樹さん、松沢慶将さん、島達也さん、岩本太志さん、石原孝さん、谷本里彩さん、村井薫さん、山崎千亜希さんのおかげです。また、室戸の漁師の皆さんに感謝の意を述べたいと思います。私は日本という国とその友達が大好きになりました。ありがとうございました。(これは、2006年3月16日に書かれた文章を意識したものです。)

事務局の主な動き

(2005年8月～2006年2月末まで)

- 8月2-5日 アースウォッチ・ジャパン「奄美諸島のウミガメの保全」チーム2開催(水野)
- 8月4日 国際哺乳類学会サテライトシンポジウムに参加(石原)
- 8月6日 成ヶ島を美しくする会「アカテガニの放卵観察会」に参加(宮形・岩本・三重大かめっぶり)
- 8月6-7日 福井県越前町へアオウミガメ2頭の混獲調査・放流(高)
- 8月6-7日 みなべにて(財)大和郡山青年会議所主催「ジュニアサマースクール」で講演(松沢・江口・仲村)
- 8月17日 土木学会水工学委員会・国土交通省近畿地方整備局・大阪府・大阪市主催「第10回水シンポジウムinおおさか」に参加(宮形・大鹿・谷本)
- 8月17-22日 明石市林崎海岸にて孵化・脱出の監視(高)
- 8月20日 三菱地所(株)・アースウォッチ・ジャパン・日本ウミガメ協議会共催
自然を楽しむ倶楽部Natureセミナー「ウミガメのすむ自然をまもろう！」開催(水野・宮形)
- 8月22-24日 米国・サンディエゴでの「Pacific-Atlantic Sea Turtle Assessment meeting」に出席(松沢)
- 8月25日 豊橋市役所にて「表浜の消波ブロック対策会議」に出席(亀崎)
- 8月25日 京丹後市網野町琴引浜鳴き砂文化館にてオサガメの全身骨格の標本を展示(水野・林)
- 9月1-5日 明石市林崎海岸にて孵化・脱出の監視(高)
- 9月2-5日 明石市林崎海岸の子ガメ脱出インターネット中継
- 9月7日 協議会HPに明石市林崎海岸の子ガメ脱出映像のダイジェスト版掲載
- 9月11日 エバーブルー第6回ビーチクリーンキャラバンに参加(宮形・水野)
- 9月13日 豊橋市役所にて「表浜の消波ブロック対策会議」に出席(亀崎)
- 9月21日 成ヶ島へふ化調査(宮形・岩本)
- 9月29日 協議会HP中国語ページ追加
- 10月4-14日 きんき環境館・環境省近畿地方環境事務所・大阪府主催「近畿の自然を考える」にて展示(宮形)
- 10月2日 表浜ネットワーク「豊橋おいでん祭」にて講演(水野・黒柳)
- 10月13日 明石ロータリークラブ寄付金の贈呈式に出席(高・大鹿)
- 10月14日 イルカさんコンサートにて活動紹介ブースを出展(岩本・中田・中本)
- 10月16日 河合塾「学問ワンダーランド」に参加(亀崎・岩本・石原・森)
- 10月17日 洲本市立由良小学校にて成ヶ島を美しくする会・日本ウミガメ協議会共催「成ヶ島の自然とウミガメについて講習会」開催(大鹿・宮形)
- 10月21日 IUCN日本委員会に出席(土谷)
- 10月22日 徳島市にて徳島県自然共生室・日本ウミガメ協議会共催「ウミガメ講演会」開催(亀崎・谷本・岩本)
- 10月23日 牟岐町にて平成17年度徳島ネイチャースクール第2回開催(亀崎・谷本・岩本)
- 11月3日 姫路市立水族館40周年記念講演会にて講演(亀崎)
- 11月3日 紀伊半島ウミガメ情報交換会例会に出席(松沢)
- 11月12-13日 東北大学での日本爬虫両棲類学会第44回大会にて発表(亀崎・岩本・石原)
- 11月18-20日 第16回日本ウミガメ会議(黒島会議)開催
- 11月26日 屋久島の永田浜でのラムサール条約登録記念式典にて講演(松沢)
- 11月28日 大阪コミュニティー財団講演会に出席(朽見)
- 11月29-30日 大阪市立自然史博物館での自然系調査研究機関連絡会議に出席(高)
- 11月30日 IUCN日本委員会に出席(岩本・石原)
- 12月4日 京丹後市網野町琴引浜鳴き砂文化館にて講演(亀崎・水野)
- 12月4日 沖繩建設弘済会創立20周年記念事業 環境シンポジウムにて講演(松沢)
- 12月9-12日 アースウォッチ・ジャパン「奄美諸島のウミガメの保全」チーム3開催(水野)
- 12月21日 日本ベッコウ協会増養殖専門委員会に出席(松沢)
- 12月29日 福井へオサガメ漂着死体調査(高)
- 1月14日 瀬戸内の環境を守る連絡会「この目で見て記録した兵庫海岸植生の現状」に参加(高)
- 1月16日 土木学会環境システム委員会「環境リスク管理のための人材養成」プログラム特別講演会に参加(高)
- 1月29日 表浜ネットワーク 第3回表浜シンポジウムにて「表浜とウミガメ」の講演(亀崎)
- 2月7-30日 財団法人地球環境市民財団の助成事業でベトナムから研修生 ハンさん来日
- 2月21日 第2回徳野・七里御浜会議実行委員会に出席(亀崎・松沢)
- 2月23-24日 JAMSTEC ブルーアース'06に参加(高)
- 2月26日 大阪湾見守りネット・国土交通省近畿地方整備局神戸港湾空港技術調査事務所主催「第2回はっといたらあかんやん！大阪湾フォーラム」に参加(高・大鹿)

ご寄付を頂いた方々

村上政子、長谷川誠、服部恵祐、井上祥夫、小島ずさ、鷹野里枝子、加藤千枝、塚田津恵子、大平貴也、実和也、前田直美、中野三郎、石川裕子、吉田夕子、井澤信二、米須邦雄、後藤清、通事祐子、通事太一郎、土田精一、三根昭義、坂東武治、徳永章二、福原富士美、照本善造、野村直人、茂木晃子、武田明美、クスタダヒロ、照屋秀司、亀崎宏樹、明石西ロータリークラブ、吉瀬絵美、大梅謙治、大牟田一美、小林雅人、原島和子、置鮎純子、関真由美、山田孝治、山下善幹、多田哲子、浦嶋神社、角絢香、近藤康男、斎藤充、(株)ルック、嶋田真由美、斎藤幸司、高原大輔、堺温哉、有限会社マルタ、林良弘、大田兼士、北島伸三

(順不同・敬称略) 2005年8月～2006年3月15日まで

平成18年度 日本ウミガメ協議会会計報告

平成16年11月1日より平成17年9月30日まで
(決算期を1ヶ月早めました)

単位：千円

収入の部	
会費	1,840
助成金・補助金	22,555
事業委託費	31,151
ウミガメ会議参加費・協賛金	3,556
寄付金	1,209
その他収入	18,804
収入の部合計	79,115
支出の部	
自然環境保全事業(調査・研究)	33,460
小笠原海洋センター運営事業	17,902
黒島研究所運営事業	9,067
ウミガメ会議開催費	3,575
情報提供事業(速報・会報)	750
管理費(人件費・事務所経費等)	11,509
支出の部合計	76,262
当期収支差額	2,853
前期繰越収支差額	6,648
次期繰越収支差額	9,501

各費目のうち、主なものは次のとおりです。

助成金・補助金収入	
東京都小笠原村補助金	12,496
日本財団助成金	2,600
地球環境日本基金助成金	1,400
セブン・イレブンみどりの基金	1,110
東洋ゴムグループ環境基金	1,000
河川環境管理財団助成金	950
世界自然保護基金ジャパン	800
WPRMFC	621
経団連自然環境保護基金	600
事業委託費収入	
環境省ウミガメ行動追跡調査事業	8,505
日本ベッ甲協会タイマイ保護事業	8,500
自然環境研究センター・モニ1000	8,000
小笠原村・海洋センター事業	2,484
明石市ウミガメ保護サポート事業	1,224
明石市ウミガメ行動追跡事業	1,208
徳島県自然環境協力員養成事業	600

STSmembers募集中

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。

日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きの方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非、入会をお誘い下さい。

携帯電話用ウミガメステッカーの配布

当会では、少しでも多くのウミガメの情報を得るために、当会の連絡先がプリントされた携帯電話用ウミガメステッカーを配布しています。

もし、海岸や海でウミガメの産卵や死体を見つけた時は、これを見て協議会にお電話下さい。

ステッカーを貼って下さる方、お友達に配っていただける方は、必要枚数をご記入の上、80円切手を貼った返信用封筒をお送り下さい。

皆様のご協力をお願いします。



携帯用ステッカー

編集後記

編集長：矢野 由紀

編集後記には、ナーバスな言葉は使わないようにしようと決めたのは、前号のマリンタートルを発行してすぐの頃でした。また、その頃私は「次号のマリンタートルは、クリスマスに会員の皆さまのお手元にお届けしよう！」と心に誓ってもしました。ところが、もやもやした気分で年を越してしまい、「(個人的ながら)じゃあ2月の誕生日までには！」と再び誓ったものの、すっかりしない気持ちで23歳になってしまいました。少しでもこのマリンタートルを心待ちにしてくださっていた皆様、そして貴重なお時間をさいて原稿を書いてくださった皆様に深くお詫び申し上げます。

さて、最近出来るようになったことがあります。車を動かすことと、(仕事柄)コーヒーの味の違いについて解るようになったことです。たくさん種類があるコーヒーですが、それぞれに良く合う食べ物があり、ベストな組み合わせに出会った時には、それはそれは感動です。しかし、それを表現して、人に伝えるというのが楽しくも難しいのです。文章を書くにも求められる、表現力が必須です。気まぐれで書いている日記を、もう少しまじめに書いてみようかと思えます。

雨の日も多くなり、いよいよ産卵のシーズンです。調査をされている方は「さぁ！」と気合いを入れていらっしゃる頃でしょうか。何よりも安全第一で、そして1頭でも多くのカメが、無事に海に帰れることを願っています。

マリンタートル (日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2006年5月10日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話:072-864-0335

FAX:072-864-0535

URL:<http://www.umigame.org>

E-mail:<http://umigame.org>